

第6回コロナ禍災害支援「熊本豪雨災害さんがうら」

講師：小川聡さん 球磨村 田舎の体験交流館 さんがうら 施設長

キーワード：孤立・コロナ禍

初参加：村上直子さん@bridgeKumamoto
鈴木さん@おもやい

【コロナ禍での避難所運営】

球磨村・三ヶ浦地域 熊本の南 山間部

さんがうら：廃校利用施設・集落支援なども行っている

令和2年7月4日 豪雨災害発生 道路崩壊・山腹破壊・孤立
・橋が多く流れたことで孤立した

【球磨村の被害状況】

- ・道路が寸断→集落孤立
- ・川が増水、氾濫→橋が流される
- ・山からの出水

①被災箇所が山間部の広範囲に広がった

→浸水、農地被害、用水崩壊

- ・山間部では山からの出水による浸水など・
- 山からの出水による浸水被害では基本的に被災証明・罹災証明は発行されず
※強く発言した人はもらえた人も。。不平等??

②交通アクセス断絶、ライフライン

→完全孤立

- ・隣接集落がないため間の道路がやられると孤立する
- 死活問題であったため、住民総出で対処
- ・独居老人、高齢者は生活を続けられない
 - ・店も全滅

③欲しかったボランティア

→コロナによって県内のみ、報道の偏りによって周知されなかった

- ・コロナによって県外のみ
 - ・ボランティアが早期に来れず
- 被災後、1ヶ月してから（橋が流出したため）
- ・メディアの報道が球磨川流域に集中したため、山間部の被害が周知されず

【被災前にやってきたこと】

- ・タイムライン避難要領
 - ・防災会議
 - ・防災組織
 - ・避難訓練
- これをやっても足りなかったと感じている（現実的に捉えられていなかった）

球磨川は暴れ川ではない→悪く言うひとはいない

【コロナ禍でのボランティアの難しさ】

- ・検温に時間がかかり長蛇の列
- ・熱中症
- ・振り分けに手こずり、作業時間が3,4時間しかない

【ボランティアについて】

- ・マナーが悪い人もいた
- 本当に被災者の気持ちになっていたか？
- 行政批判、大切が水源を無断使用、陽気な音楽など
- ボランティアの質によって印象が違う
- ・ボランティアなしには復興が進まないため、きて欲しいという声は多かった
 - ・参加人数は一般的に熊本地震のときの1/3だと言われている

【「さんがうら」避難所運営について】

- ・7月3日 17時に避難所開設・・避難者0
 - ・7月4日 次々と集まりはじめる
- 橋の流出、道路崩壊が発生、避難も厳しい状況に
- ※山間部は早めに避難しないと避難できなくなる

- ・7月5日 自衛隊物資輸送
- ・7月14日 1人体制に移行
- ・8月5日 移動販売再開

「さんがうら」運営体制

- ・施設長、役場合計3名→最大12名に

機能できなかった「さんがうら運営委員会」

- ・自分の居住区の対応で身動きがとれず

- ・兼任が多かった・

安否確認・自衛隊・警察・消防との連携

コロナ禍での衛生管理の難しさ

- ・三密を避けられない
- ・マスクはあっても消毒液がない、、
- ・夏だったため体調管理
- ・入浴
- ・生理用品
- ・認知症の高齢者への対応

地域の協力

- ・炊き出し、かけ湯コーナー、水の手配、移送、食材提供

【農村の力】

- ・生産者が協力して林道を整備
- ・大工、ガス、電気、水道の技術者

【被災を経て思うこと】

- ・消防団の役割について

→消防団の部長だったにもかかわらず、さんがうらで働かなければいけなかったため、助けられなかった

→色々が役を引き受けていないか??災害時に両立できるものか?

【意見交換】

Q. 振り返ってみて急がなくてもよかった支援・ボランティアなどはあったか?

A. 人が来なければ、自分たちでやる!という思いがあった。農村だったため、農機具が揃っており、自分たちで進められた。結束力が生まれる。家の外はみんなのできるが家財はボランティアがほしい

Q. 農村だから家と家が離れているので、社協のボランティアで集まらなければ密にならない。ある程度的人数で固まって特定の家に行き、作業する形が今後はとれるのではないか?? (ボラセンを通さないダイレクトに支援する形)

A. 以前も似たようなことは個人単位であったが、システムとして整備できれば期待できる。現地民としてはどこから来ようが密じゃないし助かるという意見だった

溝口さん: みんなが帰ったあと、重機を動かしていた。日中は外からの受け入れ、県外のチームを受け入れる体制をとっていた。社協のやつと混ざらない配慮。

Q. 避難所運営で小川さんひとりになったとき、避難者は何人?

A. 最大で16名いた。食事づくりができなくなり、避難者の方に食事作りやトイレ清掃などをやってもらい乗り切った

西村さん：避難者にも役割を与えることは重要ではないか

鈴木さん：佐賀は個人ではなく、検査もしくはワクチン接種した団体は受け入れている。コロナ禍でできないから諦めるのではなく、できないことをどうできるようにするか考えることが重要。集落は技能集団なので、現地の人の力を引き出すことが重要。現地を飛び越えて支援者にたよらない方がいい。さんがうらのことは評価していくべき。

Q. マナーの悪い団体について、そこになぜ資金を渡したのか？という声があった。団体を知りたい・・・

A. 団体、個人ともにいた。Instagramでの不適切な発信がきになった

Q. さんがうら運営委員会の理想の構成は？

A. さんがうらを応援してくれる協力者を集めた団体を作りたいな。年齢層は60代～70代。定年退職済みだが、技術をもっているフリーなひとたち。

Q. 団体がダイレクトに支援する形について、集落の一部が許しても他が許さない状況があったのでは？支援したい・受け入れたいが叶わない状況。この壁をどう超えていくのか？？？非常に悩ましい。

A. 当時がワクチンもなく、コロナに恐怖していた。ひとりでも感染すればクラスターがおきるのでは？？という不安もあり、当時は策がなかった

佐々木さん：内陸地震のときは孤立と言われたが、自分たちは自立と感じていた。自立感をどう生み出していくのかが重要なのでは？？

林さん：一人が多く役を持っているのは田舎あるあるだと感じた。どう分担していくのかが難しい課題

Q. 地域防災組織は機能したのか？

A. 難しかった。ひとりが多くの役を抱えている。担当を細かく決めるのではなく、全体で考えていかないとイレギュラーに対応できない

溝口さん：コロナが未知のウイルスなのか？既知のウイルスなのかで対応が変わる。コロナ初期は確率で考えるようになった。確率が低い方を選択し、謝罪する覚悟を決めておく

県外から受け入れるにしても、流行していない地域の団体を優先してきてもらうなど

マナーの悪い団体について

・仕方ないことではあるが、説明やなぜこれを行っているのかを問いかけていく。

・ダラダラする人に助けられる人もいる。張り詰めている状況を見て空気を和らげる役割をはたすことがある（意図的にやっている人もいる）

石田さん（マナーについて）

- ・行きバスの中でオリエンテーションをした
- ・トラック、重機をセットとして

杉田さん：人吉の災害の時は県外は受け入れないということだったが、宮崎県側の方が文化的・生活圏的に近い、親戚が多い状況があった。危険な熊本側から支援に行くより、宮崎側からの方が安全だった。丁寧な判断が必要。

マナーについて

本当にやる気のない人はやはりいる。それは外的な要員で行けと言われて来る人もいる。

塚原さん：豪雨がおきるシーズンはだいたい決まっている（6月～9月とか？）全国的にこの団体内でシフトを組んで、予算を調達し、シフト間は給料保証があるような形にするというのでは??

鈴木さん（マナーについて）

受け止められない場面やタイミングもある。どうやったら許容できるのかを考えていく必要がある。川でボランティアが喜んでいる状況から地域の魅力が再発見できるかも（再発見できるタイミングがあるかも）

【チャット】

スポットでいくという事についての、リスクというか懸念。メモ。悪徳業者が、自費解体や関連工事受注を受けるために入っていく場合がある。その証明確認は必要。

社協のオリエンテーションではしつこいくらい「被災者の気持ちを大事に」と言われるところが殆どです。それをしっかり受け取れるかどうか、ボランティア本人次第ですが。スポットで入る団体は、団体の責任でオリエンテーションできることが大事ですね。